

中級 C クラスの授業

—日本語教科書 中級 I, II を使って—

仙波 純子

はじめに

ここ数年、私は学部・大学院の中級レベルの日本語の C クラスを担当している。C クラスの授業は週6コマ、そのうち4コマ(CO)が中級教科書、1コマ(C1)が文型、そして残りの1コマ(C2)が聴解に当てられている。私は主として CO を受け持っているが、この授業では、1990年度から教材として、早稲田大学日本語研究教育センター編の新しい「日本語教科書 中級」を使用している。そこで、1990年度・1991年度の CO の授業をふりかえり、この教材をどのように扱ったか報告してみたい。

1990年度

	前 期				後 期			
	中級教科書		文型	聴解	中級教科書		文型	聴解
理C(1)	■	■		■				
理C(2)	■	■			■	■		

1991年度

	前 期				後 期			
	中級教科書		文型	聴解	中級教科書		文型	聴解
理C(1)	■	■	■		■	■		
C(2)			■			■		

上の表で、斜線の部分は私が担当した。1990年度後期の理C(1)のクラスなどは、全体の5/6を受け持っていたので、学生たちと週3回顔を合わせることになり、一人一人の性格まで分かるようになった。クラスの構成は次の通りである。

1990年度

理CO(1) { 大学院(工研)9人...韓国3, 中国3, 台湾1, ハンガリー1, インドネシア1。
学部(理工)10人...インドネシア8, 中国1, 台湾1。

理CO(2) 大学院(工研)15人...中国8, 韓国7。

1991年度

理CO(1) { 大学院(工研)15人...インドネシア4, 中国4, タイ2, フィリピン1, サウジアラビア1, イラン1, 台湾1, アメリカ1。
学部(理工)1人...マレーシア1。

CO(2) 大学院(商研・法研)19人...中国6, アメリカ5(うち3人は前期のみ), タイ2, 韓国2, 台湾1, ドイツ1(前期のみ), フランス1, スペイン1。

注——登録はしたものの一度も授業に出て来なかった学生は省いてある。

I. 1990年後

早稲田大学日本語研究教育センター編の新しい「日本語教科書 中級」は、I, II, IIIの3冊から成り、それぞれ15課(79ページ), 25課(183ページ), 24課(258ページ)で構成されている。だが、週4コマの授業でIIIまで進むのはとても無理であろうと考えて、1990年度の理COのクラスでは、とりあえずIIまで終えることを目標にした。

ところが、実際に授業をやってみると、これが思うように進まない。というのは、教室が確保できなかったことから、週2コマ(奇数の課のみ)は理CO(1)と理CO(2)の学生をいっしょに教えていたからだ。なにしろ

人数が多いうえに、B のレベルに近い学生から判定 F の学生まで混じっているのである。結局、10 人いた学部学生のレベルに合わせて授業を進めながら、前期でようやく教科書 I を終えた。

後期になると、理 CO (1)、理 CO (2) の合同クラスは、学生の数が幾分減って、かなりやりやすくなった。また、理 CO (1) のクラスは 2 コマふえ、週 4 コマとなり、一人で奇数課・偶数課すべてを教えることになった。そこで後期からは前期と少しやり方を変えてみることにした。前期は、重要な文型・言い回しなどの例文を黒板に書いていたものだが、後期からはワープロで打ってコピーし、学生に配ることにしたのだ。その結果、板書する時間が節約され、学生も、いちいちノートに写しとる手間が省けるうえ、まえもって渡された次の課の例文を家で予習できると満足していたようだ。この方法で、結局のところ、後期は教科書 II の 18 課まで進んだ。

II. 1991 年度

1. プリントでとりあげた項目

1990 年度に試しに作ってみたプリントが好評だったので、1991 年度は、とりあげる語句・言い回しの種類・数もふやして、教科書 I, II のすべての課についてプリントを作ってみようと思立った。だが、実際に進んだのはやはり教科書 II の 18 課まで (II の 17 課は省いた)。したがってプリントもまだそこまですべてできていない。そこで、今までやってきたことに無駄はなかったか、何が欠けているのかよく考えるために、1991 年度にプリントでとりあげた語句・表現を整理してみた。すべての項目を挙げると次のとおり。文脈の中でないと意味の分かりにくいものには、教科書の用例を付け加えておく。

注—1. 「I-10」などは教科書 I の 10 課という意味である。

2. neg. は否定を表わす語を意味する。

動詞——あきる、味わう、当たる、あふれる、生かす、受ける、(～と / ～を) 訴える、(～に) 訴える、おさまる、驚く、およぶ、(～に) かかる、(～が) かかる、(～を) かける、欠ける、(～を) 欠かさない、囲まれている、片づける、兼ねる、(～に / ～と) 決める、向上する、越す、こたわる、困る、こめる、探す、縛る、しぼる、知る、すます / すませる、沿う、そろう、たどる、楽しむ、たまる、違う、通じる、つかむ、包む、通す、通る、並ぶ、慣れる、似る、のぞく、のぼす、(～に) のぼる、(～から / ～に) 始まる、ひたる、広がる、広める、防ぐ、誇る、迷う、見る、めざす、もぐる、もつ、わかる、わく、渡る。

「て」+補助動詞 etc.——～ている、～ておく、～てくれる、～てしまう / ～ちゃう、～てみせる、～てみる、～てもらう、動詞の連用形+に+動詞(これはきつと私のことをインタビューしに来たのだ。I-10)。

副詞——あいにく、あくまで、あまり / あんまり (+neg.)、意外に / 意外と、いかにも (～らしい)、いくら～ても / でも、いちおう、一見、いったん、いよいよ、いわば、思うように+neg.、思わず、かえって、かならず、かならずしも+neg.、かなり(の+名詞)、かねがね、きちんと、きつと、きまって、くれぐれも、けっこう、こつこつ、さすが(は) / (に)、さっぱり、さっぱり+neg.、しいて、しきりに / しきりと、事実、じつと、実に、実は、しぶしぶ、しょっちゅう、ずいぶん、少なくとも、すっかり、ずらっと / ずらりと、せいぜい、せっかく(の+名詞)、せっせと、せひ、せめて、ぞうっと / ぞっと、そもそも、そろそろ、第一、たいてい、たしか(に)、たしかに～(だ)が、たまたま、つくづく (～と思われ知られる)、どうしても+neg.、とうとう、どうにも (+neg.)、どうも、どうやら (～ようだ / ～らしい / ～そうだ)、ともかく、とりあえず、とりわけ、なかでも、なかなか、なかなか+neg.、なにしろ、なるべく、なんだか、はるかに、びたりと / びたりっと / びたっと / びったりと、

ふと / ふっと, べつに + neg., ぼうっと / ぼーっと, ぼそぼそ(と), まえもって, まさか, まさに, まず, まるで (+ neg.), まんざら + neg., むしろ, もう, もちろん, もともと, やたら(に) / (と), やはり / やっばり, よほど。

形容動詞——同じ, 盛ん, 苦手, ひさしぶり, 下手, 夢中。

助動詞——せる / させる, れる / られる。

助詞——くらい, こそ, さえ, でも, の (形式名詞的用法), ばかり, ほど, まで。

接尾辞——～あまり, ～がたい, ～がち, ～がる, ～にくい, ～ぶり / ～っぷり, ～目 (陳さんは来日して2年目になります。I-12), ～来 (中谷さんは, この十年来, そのそば屋以外の店に行ったことがない。I-4)。

接続表現——一方, ～うちに(歩いて行くうちに, 若様のすました顔を思い出しました。II-1), ～が早いか, ～かぎり(は)～, かつ, ～から～ばいい, ～から見て, ～から見ても, 考えてみると, 聞いたところでは, この結果 / その結果, しかも, ～し～し (築15年ですが, 南向きだし, 家主さんもいい人だし。I-3), 実のところ, ～ず(に), ～末(そして, 非常に苦勞した末, 彼は, 世界ではじめての小型トランジスタラジオの製作に成功し, 世界中に輸出していく。II-15), すなわち, そう言えば, そこで, そのうえ, そのうえで, その代わりに, それだけに, それどころか, それに対し, ～だけに, ただ, ただし, だとすれば, 動詞の連体形 + たびに, ため (原因), ～たり～たり, ちなみに, つまり, ですから / だから, では / それでは, ～というだけあって, ～とか～とか～なんか, ～どころか, ところで, ～としたら, ～とは対照的に, ～と見えて, ～

ながら、動詞+(の)なら、～なり～なり、～にしたがって、～にもかかわらず、～(の)につれて、～はおろか、～ばかりか、もつとも、～ものの / ～とはいうものの、～や～や～なんか、～やら～やら、(～が)ゆえに、要するに、要は。

文末表現——～かもしれない、～と聞いている、～ことがある / ～こともある、～ことにする、～ことになる、～ざるをえない、(～より)しかたがない、～じゃないかと思う、～そうだ(伝聞)、～そうだ(様態)、～そうにない / ～そうもない、～だった / ～でした(茂さんは野球が好きだったわね。I-7)、～てごらんさい、～てたまらない(コロンブスは、うれしくて、うれしくて、たまりませんでした。II-18)、～てたまるものか(ただでにおいをおかずにされてたまるものか。II-14)、～てならない(...このごろ気になってならないことが一つあります。II-17)、～てはどうだろうか / いかかであろうか、～ではないだろうか、～ではなからうか、～といい(本を買うのなら神田の古本屋街を覚えておくといいですね。I-12)、～というのだ、～と言えよう、～といつて(も)よい、～といわれている、～と思われる、～と聞いている、～とする、～とのことである、～なんてできない、～にしておきましょう、～にすぎない、～にする、～にちがいない、～には～た(試験監督の目を盗んで、周囲の連中の答案を見るには見たが、肝腎の自分のほうは解けていない。I-15)、～のも無理はない、～ばいい、～はずはない / ～はずがない、～はめになる、～ばよかった、～べきだ、～べきだった、～ほうがいい、(～ときは)～ものだ / ～ものだった(子供たちが小さいときは、よくボール投げやサッカーの相手をしたものだった。I-11)、～ものだ / ～ものではない(昔は、女の子は勝負事をするものではないと言われたらしいけど、今は女性の愛好者が増えている。I-13)、～ものだ(やっぱり悪いことはできないもんですね。I-15)、～ものだ(こうした人文系の学科はだれしもサッパリわからないということはないものです。II-4)、(～た)も

のではない(テレビを見ながら勉強するのはながら族といい、ほめられたものではありません。II-6), ~ようがない(要するに日本の言葉で、床の間だとか茶の間だとかいうような、いいなれている「間」という言葉は、英語に翻訳しようがないわけである。II-12), ~ようだ, ~(よ)うとする(例えば、大手町で丸ノ内線から都営三田線に乗り換えようとすると、四、五分歩かなければなりません。I-9), ~ようになる, ~ようになっている, (~ても)よかろう, ~わけだ, ~わけではない, (~という)わけにはいかない。

その他の表現——あと+月日・時間+もすれば, 名詞+のあまり(中には, うれしさのあまり, 声をあげて, 泣くものもありました。II-18), ~は~にある(春山さんのもう一つの関心は, 昼に何を食べるかということにある。I-4), 一種の, いかなる+neg, いわゆる, AはBを捕って余りある, ~が~の原因です, 聞くところでは~そうです, きらいがある, この~では~そうだ(まさ子さんは, この人数では三十分以上待たされそうだと思います。I-5), これは~ためです(原因), 時間がとれない, 時間がとられる, ~次第で, (~の)せい(で)/(か), そうでなくてさえ, ~そのもの, それなりの, 単に~(という)だけで(は)なく, 単なる, ~を中心に, ~を通じて, つもり, ~ですが, ちょっと~ようですね(日当りは悪くないようですが, ちょっと向かいの工場がうるさいようですね。I-3), ~という点では, ~というのは~からだ, ~というように, ~と言えば聞こえはいいけれど, ~といった(...政治経済学部, 法学部, 商学部, 教育学部, 社会科学部といった学部...I-1), ~といっても, ~といえば, ~を通して, とところ(...このムダのあるところが, 日本の住まいのよさになっていることがわかる。II-12), とところ(ドイツ語の文法が苦手なもんですから, 四苦八苦してるところです。I-15), (~た)ところ(私は, 新聞をとるより今の生活に困っていることを説明したところ, その人は私に同情してくれて...I-10), (~た)とこ

るで(“五傑表”のワクをひろげて“十傑表”にしてみたところで、宮崎県以外の他の県では、「黒木」は“十傑表”のなかへは行ってこない。II-13), (~という)ところだ(暮は大林君のほうがやや強く、将棋の腕前は谷山君のほうが少し上というところでは。I-13), (~た)ところでは(わたしが東京について調べたところでは64パーセント、このとき東風が吹いていると、90パーセント雨になりました。II-2), このところ~ている, ~として, (~が)~としては, どちらでもかまいませんが, できれば~のほうが, なにかにつけ(て), ~なんか, なんととっても/なんといったって, なんとかして~たい, なんの+neg, ~に対して, ~について, ~にとって, ~にもかかわらず, ~によって, (~か~かは)~によって違う, ~によると, ~にわたって, ~にはじまって/~にはじまり, ~(の)が何よりの楽しみです, ~の~ないの(ところが, その旅人は, よほど, ミョウガが好きと見えて, 「今どき, ミョウガとは珍しい」と, 喜んで, 食う食わないのおかみさんがあきれるほど, ミョウガを食べました。II-8), ~は~で(しかし大人は大人で概念をもてあそぶ。お地蔵さんは仏さまだ。尻に敷いてはもったいない。そんな大人の分別から, 次郎兵衛さんは, いったんは子どもたちをたしなめた。II-16), 場合によっては, (~を)はじめ(として), ~ば~でもしかたがない, ひまさえあれば, ~を経て, ポイントは~(こと)です, 毎~のように(そう, 毎場所のように両国の国技館に行ってるよ。I-7), 動詞の過去形+まま(時には大雨と嵐の中で立ったままメシを食う覚悟も必要だ。I-6), 身につける, ~をめぐる, もしかすると/もしかしたら, Aも~だが, Bも~だ(春山さんは, そばも嫌いではないが, うどんも好きなので, きつねうどんや鍋焼きうどんをよく食べる。I-4), ~がもとで~(てしまった), ~をもとに, ~のもとに, よほどの~, AよりBのほうが~。

2. 例文の実例

これらの項目について実際にどのような例文を作ったか, つぎにいくつ

か実例を示そう。

めざす A [人] {が / は} B [目的・目標] をめざす。A が B を目標としてねらう。

- (1) 「生活デザイン百貨店」をめざしたというだけあって、デザインにはこだわっているようだ。I-8, p. 38, l. 7.
- (2) 弟は早稲田大学をめざして受験勉強をしている。
- (3) 登山隊はエベレスト山頂をめざして出発した。

意外に / 意外と 考えていたことと実際とが違うことを表す。「意外と」は主に話し言葉で使われる。

- (1) 読書調査をみても、日本の少年は、エジソンの伝記を読んだ人が意外に多く、世界の発明王を尊敬していることがわかります。II-6, p. 34, l. 6.
- (2) 日曜日なのに、デパートは意外にすいていた。
- (3) もっと難しいかと思ったら、試験は意外にやさしかった。
- (4) きみって意外と料理が上手なんだね。

～くらい / ～ぐらい ① 活用語の連体形に接続し、例を示して、問題になっていることの程度を表す。

- (1) 会社が都心にあるので、食事をするところには困らない。かえって、目移りがするくらいだ。I-4, p. 17, l. 4.
- (2) 心配で食事ものどをとおらないくらいだ。
- (3) 仕事が忙しくて、休みもとれないくらいだ。
- (4) きのは足が痛くなるくらい歩いた。

② 数詞に接続して、だいたいの数量や程度を表す。

- (1) それでも、社員の四分の一くらいは、ここを利用している。I-4, p. 17, l. 9.
- (2) 六星ぐらいの部屋で、あとお風呂と台所がついているのがいいんですが。I-3, p. 11, l. 4.
- (3) ——御予算はどのくらいですか。

— ええと、五万円ぐらいであればいいんですが。I-3, p. 11, ll. 8-9.

～ながら ① 同じ人が並行して二つの動作を行うことを表す。

動詞の連用形に接続する。

- (1) 昼間働きながら夜間の授業を受けている学生も大勢いると聞いております。I-2, p. 8, l. 2.
- (2) 奥様のお手製のアップル・パイなどごちそうになりながら、国による考え方の違いについていろいろお話をうかがった時のことをなつかしく思い出しております。I-2, p. 10, l. 4.
- (3) 私は音楽を聞きながら勉強する。
- (4) 新聞を読みながら食事をするのはやめなさい。

② 矛盾するような二つのことが成立していることを表す。「ながらも」の形をとることもある。動詞の連用形、形容詞の終止形に接続したり、名詞に直接続く。

- (1) 先生もご存じのように、わたくしは日本人でありながら外国生活が長く、その点で常識が不足しております。I-2, p. 9, l. 10.
- (2) 近くまで行きながら、友達のアパートに寄らずに帰った。
- (3) 末筆ながら、奥様はじめご家族の皆さんによろしくお伝えくださいませ。I-2, p. 10, l. 8.
- (4) 池田さんは、仕事がうまくいっていないらしい。他人事ながら心配だ。
- (5) 狭いながらも、やっとマイホームを手に入れた。

～というのだ 他から聞いたことを述べながら、説明を付け加えるときに使う。

- (1) 実のところ、男性が「結婚できない」背景には、男性の勤務状況の問題もある。男ばかりの企業に入り、残業、休日出勤などで自由な時間が持てず、女性と知り合う機会が少ないというのだ。I-14, p. 68, l. 1.

(2) 彼は都心から郊外へ引っ越すことにした。そばに大きなマンションが建って、日当たりが悪くなったというのだ。

(3) 最近、はしを上手に使えない子供がふえている。スプーンやフォークを使うほうが食べやすいというのだ。

A は B を補って余りある A [よいこと・利益・長所] は B [悪いこと・損失・短所] を補って余りある。A は B よりも大きい / 多い。
Aのおかげで B という悪いことが目立たなくなる。

(1) しかし、無人島の魅力は、そんな苦勞を補って余りある。I-6, p. 29, l. 10.

(2) 利益は損失を補って余りある。

(3) 今回の成功は先の失敗を補って余りある。

～といっても 前に述べた～ということばについて、説明を加えるときに使う。～ということばの与えるイメージと現実の～とが違っているときに用いる。

(1) 十四の時に、やっと願いがかなって、コロンブスは、船乗りになることができました。船乗りといっても、コロンブスの乗る船は、小さい、帆前船でした。ですから遠くへは行けません。II-18, p. 109, l. 3.

(2) 彼は、時々奥さんの代わりに料理をする。料理といっても、彼が作れるのは目玉焼きとカレー・ライスだけだ。

(3) 私は毎週土曜日の午後は六本木に行きます。六本木といっても、遊びに行くんじゃなくて、日本語学校に通っているんです。

(4) 母は英語が話せます。でも、話せるといっても、簡単な日常会話程度です。

3. 例文を使って

ほんの数例挙げてみたが、このような例文を実際に授業で使ってみたところ、いろいろ問題点が明らかになってきた。たしか4月の終わり頃だったと思う。理 CO のクラスで、イラン人の学生に突然こんなことを言わ

れた：「先生、プリントで使われている漢字が読めません。だから辞書をひいて意味を調べることができないんです。」これには少々驚いた。というのは、例文ではなるべく平易なことばを使うようにしていたし、前年度の理 CO のクラス(非漢字圏のインドネシアの学生も10人ほど混ざっていた)で、こんな苦情をきいたことは一度もなかったからだ。他の学生たちの意見も聞いてみると、サウジアラビア、タイ、フィリピン、インドネシアの学生たちは、ぜひ漢字にふりがなを付けてほしいという。一方、中国人学生は「ふりがなはなくても、自分で調べられる」、「先生がそこまでやらなくてもいいんじゃないか」などと余裕のあるところを見せていた。

そこで、双方の意見を折衷し、各課ごとにその付録として、プリントで使われているやや難しい漢字の読み方を付け加えることにした。学生は、この付録を必要に応じて使えばいいのだ。そこには、複合動詞、カタカナことばなどについても、簡単な説明を加えておいた：

子孫(しそん) 平均寿命(へいきんじゅみょう) 面積(めんせき) 国土(こくど) 哺乳類(ほにゅうるい the Mammalia) 香港(ホンコン Hong Kong) 産業用ロボット(さんぎょうよう robot) 信じ込む(しんじこむ) 信じる+込む 追っかける ← 追いかける(おいかける) カルチャー・ショック(cultural shock) クジラ(whale 鯨) km²(平方キロメートル) へいほうキロメートル)

こうして、学生たちは、新しいことばでも自分で辞書をひいて意味を調べることができるようになり、予習がしやすくなった。事実、例のイランの学生は、しだいに使える語彙が増え、1991年度の終わり頃には、4月とは見違えるほど漢字が読めるようになった。

プリントでとりあげた項目の数は、課によって異なるが、だいたい1課につき10~20項目である。各課ごとに何を選ぶか問題になるが、選択の一つのめやすとして、一つの課で複数回使われている語句、特に違った用法で二回以上使われているものはとりあげるようにした。たとえば先に引用した「~ながら」の場合、教科書 I の2課には①の用例、②の用例

がそれぞれ二つつ出てくる。これに各々二、三の例を加えて、①と②の用法の違いが分かるようにした。また、「～くらい/～ぐらい」の場合は、教科書 I の 4 課に ①、② の用例が一度ずつ出てくるが、② の用例はすでに 3 課にみられるので、復習を兼ねて付け加えた。

教科書を先へ進めば進むほど、既習の語句・表現が増えるわけだが、なかには何度出てきてもその意味・用法が分かりにくいものがある。副詞の「むしろ」がそれで、教科書 II の 4 課で一度項目としてとりあげたのだが、15 課まで進んだところで、それまでに教科書に出てきた用例をすべて抜き出し <(1)~(7)>、それに教例加えて <(8)~(11)>、もう一度整理してみた。

むしろ だいたい同じ程度の状態にある A・B 二つの事物・事態のうち、どちらかといえば A より B (または B より A) のほうが適切であるという判断を表す。

- (1) 考えてみれば、今年(83年)卒業する学生が大学の志望を最終的に決めた79年の初めごろには、むしろ技術革新は停滞しているという見方が一般的でした。II-4, p. 16, l. 13.
- (2) やはり文科を出た人は「私は数学や物理は嫌い、技術のことはサッパリ分からない」となにかにつけ、おっしゃる人が多いようです。しかも、それはご謙遜であるかといえば、かならずしもそうではないようです。むしろ誇らしげにしている感じもあります。II-4, p. 19, l. 2.
- (3) 考えてみると日本というのは面白い国で、「彼は頭がいい」とか「論理的である」というのが、かならずしも褒め言葉ではない。頭や論理が勝ちすぎるとよくないというのがむしろ一般であります。II-4, p. 19, l. 8.
- (4) 千三百という特許はおどろくべき成功ですが、むしろ、「電気の時代」に入るという時代の要求にこたえ、自分の信念に忠実で、こつこつと努力をつづけたことに偉大さがあると思います。II-6, p. 33,

1. 8.

(5) この広告から引き出せることは、それが情報を提供しているよりはむしろ誤解の種となっているということだけである。II-10, p. 58, ll. 1-2.

(6) 西洋音楽では、「間」というものは一種の休止符で表されるが、日本の音楽では、その「間」がむしろたいへん大切な部分になり、単なる休止符ではなくなってくる。II-12, p. 65, l. 2.

(7) 戦後の日本の創業者の多くが、学歴もないのによくあれだけのことをやったといわれるが、むしろ、松下幸之助氏や本田宗一郎氏は、学校秀才ではなかったがゆえに非常に新鮮な発見ができたのだと思う。II-15, p. 93, l. 1.

(8) こんなに雨が降っているのだから、外出するよりむしろ家にいるほうがよい。

(9) 私はベートーベンよりむしろモーツァルトが好きだ。

(10) 彼は天才というよりむしろ気遣いだ。

(11) その赤い服もすてきだけど、あなたにはむしろこの黒のほうが似合うんじゃないかしら。

(8)~(11)のように単純化された形であれば、学生も理解しやすいのであろうが、教科書の用例は必ずしも単純明快ではない。だが、どんなに分かりにくい語句でも、用例を十くらい並べてみると、その意味や用法が自ずと明らかになってくるものだ。よく使われる語句・表現を効率よく学習させ、定着させるのに、この方法はかなり有効だと思われる。

例文は、なかなかよいものが作れない。たとえば「～ようがない」という文末表現について、私はうっかり次のような例文を作ってしまった。

動詞の連用形+ようがない あることをする方法がない。あることができない。

(1) 要するに日本の言葉で、床の間だとか茶の間だとかいうような、いいなれている「間」という言葉は、英語に翻訳しようがないわけで

ある。II-12, p. 66, l. 8.

(2) はしもフォークもないので、食べようがない。

(3) かぎを忘れたので、家に入りたくても入りようがない。

(2)は、まず、何を食べるかが抜けている。「先生、パンやお菓子なら手で食べます。」と中国人学生。そして、イラン・サウジアラビア・インドネシアの学生からは、「私たちの国では、ふつうの食事だって手で食べることがあります。」と言われてしまった。学生たちは、なにも中国・韓国や欧米からばかり来るわけではない。イスラム文化圏から来る留学生だっているのだ。例文を作るときは、よくよく細かいところまで注意をしなければならぬと反省した次第である。

一般に C クラスの学生のあいだでは、「ていねいに言葉の使い方を学びたい」という要望が強く、例文を使つての学習は好評だった。しかし、一つ一つの語句・表現にこだわりすぎると、文章全体で何を言おうとしているのかを見失うおそれがある。そこで、時々要約練習を試してみた。ある一つの課の内容を 200 字以内に要約するというものだ。教科書、ノート、プリント、辞書など持ち込み可のテストという形で、何度かやらせてみた。そして添削して返すときに、私自身の作ったいわば模範解答のようなものも配った。要約させてみると、学生の理解力と表現力を同時に測れる。回を重ねるごとに、学生たちはコツをつかみ、要領よくまとめるようになってきた。

おわりに

中級レベルの日本語を学ぶ学生は、日本語の表現に慣れ、語彙を増やすために、いろいろな種類の文章を数多く読む必要がある。だが、学部・大学院で専門科目をこなしながら、外国語として日本語を学ぶというのは、時間的にかなりきつようだ。特に理工系の学生たちは、日本語の教科書を学習するだけで手一杯らしい。そこで、教科書をいかに効率よく学ばせ、それをいかに定着させていくかが問題となる。この問題を解決する

ための一つの試みとして、私は教科書に出てくる語句・表現について例文を作り、プリントにしてみた。

ところが、1990年度・1991年度と2年続けて、教科書はIIの18課までしか進まなかった。副教材としてプリントを使うと、そちらにある程度時間をとられて、進度が遅くなってしまうのかも知れない。とりあげた語句・表現の中には省いてもよいと思われるものもあるので、再検討してみたい。さらに今後は、一つ一つの例文をもっと分かりやすいものにし、手直ししていかねばならない。比較的やさしい課は速読することにして、1992年度こそなんとか教科書IIを終わらせたいと思っている。